

# チャイコフスキーの誘惑

## Temptation of Tchaikovsky

指揮とお話 アンドレア・バッティストーニ

Andrea Battistoni, *conduct & talk*

プロフィールはp.8をご覧ください。

コンサートマスター 三浦章宏

Akihiro Miura, *concertmaster*

チャイコフスキー：イタリア奇想曲 作品45 (約15分)

Pyotr Ilyich Tchaikovsky: Capriccio italien, op.45 (ca. 15 min)

休憩 Intermission (約15分)

チャイコフスキー：交響曲第5番 ホ短調 作品64 (約50分)

Pyotr Ilyich Tchaikovsky: Symphony No.5 in E minor, op.64 (ca. 50 min)

- I. アンダンテ - アレグロ・コン・アニマ  
Andante — Allegro con anima
- II. アンダンテ・カンタービレ、コン・アルクーナ・リチェンツァ  
Andante cantabile, con alcuna licenza
- III. ワルツ、アレグロ・モデラート  
Valse. Allegro moderato
- IV. フィナーレ。アンダンテ・マエストロソ  
- アレグロ・ヴィヴァーチェ  
Finale. Andante maestoso — Allegro vivace

第5回

平日の  
午後の  
コンサート

5/17(水) 14:00開演 東京オペラシティ コンサートホール

Wed. May 17, 2017, 14:00 at Tokyo Opera City Concert Hall

主催：公益財団法人東京フィルハーモニー交響楽団

助成：文化庁文化芸術振興費補助金(舞台芸術創造活動活性化事業)

Presented by Tokyo Philharmonic Orchestra

Subsidized by the Agency for Cultural Affairs Government of Japan

イラスト：ハラダ チェ



5/17



## チャイコフスキー：イタリア奇想曲 作品45

リムスキー＝コルサコフの『スペイン奇想曲』と共に、ロシアの作曲家が書いた『異国物の管弦楽曲』を代表する作品。ロシア音楽を愛するイタリア人パッティストーニにピッタリの1曲でもあります。

チャイコフスキーは、1875年から78年にかけて、ピアノ協奏曲第1番、バレエ『白鳥の湖』、交響曲第4番、歌劇『エフゲニー・オネーギン』、ヴァイオリン協奏曲など、名曲を立て続けに生み出しました。またこの時期は、ミリューコヴァなる女性との突然の結婚と破局、モスクワ河への入水、メック夫人からの年金の開始、それによるモスクワ音楽院辞職などの重要事が続いた激動期でもありました。『イタリア奇想曲』は、その延長線上に位置する1880年に作曲された作品。この年には『弦楽セレナード』、序曲『1812年』も書かれ、第1充実期ともいべき名作群を締めくくることになります。

1878年にモスクワ音楽院の教授を辞して自由な時間ができたチャイコフスキーは、各地に旅行するようになり、1879年末には、弟モデストと共にパリやローマを訪れました。本作は、その際に受けた陽光輝くイタリアの印象を、旅行中書き留めたメロディなども用いて描いた、チャイコフスキーには珍しいほど明るく躍動的な音楽。翌年ロシアに戻って完成され、12月モスクワで初演されました。

曲は、色彩感溢れる5つの部分がメドレー風に連なっています。ローマ滞在中のホテルの前庭の騎兵隊兵舎から毎日聞こえていたというファンファーレに始まり、弦楽器による荘重な主題、オーボエで奏されるイタリア民謡『美しい娘』などが登場。テンポを速めて軽快な主題が2つ奏され、クライマックスが築かれます。さらにテンポを上げて南イタリアの民族舞曲タランテラのリズムを交えながら華麗に進行。一旦重厚な場面が変わった後、畳みこむように高揚し、高らかに終結します。全体に管楽器の活躍が際立っており、その妙技も聴きどころです。



チャイコフスキーの三大交響曲(第4～6番)のひとつ。ロシアの全交響曲の中でも屈指の人気を誇っています。

交響曲第4番から10年、指揮活動等で外国に滞在することが多く、創作活動は若干停滞気味だったチャイコフスキーですが、1888年、好環境のプロロフスコエ村に居を構えたのを機に創作意欲が沸き上がり、僅か3か月ほどで本作を完成しました。同年ペテルブルクで初演された際には、批評家から評価を得られなかったものの、翌1889年ハンブルクで大成功。以来、西欧を中心に人気を獲得しました。

チャイコフスキーは、第1楽章冒頭の旋律を「運命、もしくは神の摂理への完全な服従」と表現しました。そのため、本作は「運命」がテーマだと解釈されており、その旋律は「運命動機」と呼ばれています。主な特徴は、運命動機が固定楽想として各楽章に登場する点、第3楽章に通常の交響曲とは違ってワルツを用いている点、暗い運命動機が終楽章では長調に姿を変える点など。全体をみれば、深刻さ、甘美さ、情熱、歌、迫力等々、チャイコフスキーの魅力が満載された名曲です。

**第1楽章：アンダンテ — アレグロ・コン・アニマ。**最初にクラリネットで奏されるのが「運命動機」。主部は、歩むような第1主題と、のびやかな第2主題を中心に、ダイナミックな展開を遂げます。

**第2楽章：アンダンテ・カンタービレ、コン・アルクーナ・リチェンツァ**(=多少の自由さをもつ)。ホルンのソロで出される主題を中心とした甘美で陶酔的な緩徐楽章。やや速めの中間部が挟まれます。

**第3楽章：ワルツ、アレグロ・モデラート。**作曲家十八番の艶美なワルツに、小刻みな動きの中間部が対比されます。

**第4楽章：フィナーレ、アンダンテ・マエストーソ — アレグロ・ヴィヴァーチェ。**荘重な序奏から速い主部へ移り、荒々しく刻まれる第1主題と、木管で出される第2主題を中心に激しく進行。全休止の後、凱行進行曲のような終結を迎えます。

